

## A-5 ここじゃ雨なんか降らない -現代ロシア語の否定生格に見る視点と存在の認知的関係<sup>1</sup>

木下 蒼一郎

(東京大学大学院人文社会系研究科/日本学術振興会特別研究員)

要旨：現代ロシア語の自動詞文の主語・他動詞文の直接目的語は、標準的にはそれぞれ主格・対格に置かれるが、これらの格が否定文において生格 (genitive) に置き換わることがある。この交替は否定生格 (Genitive of Negation) の名で知られ、否定生格に置かれる名詞句はその指示対象に関する「存在コミットメント」を欠くと言われる (Chvany 1975, Babby 1980, Borschev & Partee 2002a, Harves 2002a, 2013, Partee & Borschev 2004, Kagan, 2007, 2010, 2013, Borschev et al. 2008)。この現象について Partee & Borschev (2004, 2007) 他は、「存在する」という状況一般をそれを構成する「存在物」(THING) と「場所」(LOC) とに分解し、話し手の視点の中心 (perspectival center) が LOC の側にある場合に限り、それを表象する文における否定生格が認可されると述べる。この説明は、非能格自動詞の主語に否定生格が例外的に生ずる現象を説明する点で有力視されうる (McGrady 2022) が、LOC を中心とした語りが THING に関する存在コミットメントを削除するメカニズムは定かでない。これに対し本発表は場所句を有標な形で明示する行為が私たちの反省的 (reflective; Recanati 2000) 態度と分かち難く結びついていると考えることで、認知的観点からこの空隙を埋めることを試みる。

### 1. 現代ロシア語における「否定生格 (Genitive of Negation)」と「存在コミットメント」

現代ロシア語の自動詞文の主語・他動詞文の直接目的語は、それぞれ原則として主格 (nominative)・対格 (accusative) に置かれる。

[自動詞文における主格主語]

- (1) 

<i>Otv'ét</i>	/* <i>Otv'ét-a</i>	<i>iz</i>	<i>pólk-a</i>
<i>answer-M.SG.NOM</i>	/* <i>answer-M.SG.GEN</i>	<i>from</i>	<i>regiment-M.SG.GEN</i>
<i>pr'is-él</i>	/* <i>pr'is-l-ó</i> .		
<i>arrive-3.SG.M.PAST</i>	/* <i>arrive-3.SG.N.PAST</i> ] <sup>2</sup>		

 (Babby 1980: 71)  
 「連隊からのその返答はもう到着している」

[他動詞文における対格目的語]

- (2) 

<i>Anna</i>	<i>kup'ila</i>	[ <i>žurnál</i>	<i>/*žurnál-a</i> ].
<i>Anna-NOM</i>	<i>buy-3.SG.F.PAST</i>	[ <i>magazine-M.SG.ACC</i>	/* <i>magazine-M.SG.GEN</i> ]

 (Harves 2013: 1)  
 「アンナはその雑誌を買った」

(1), (2) に見る通り、上記の環境に現れる主格/対格を生格 (genitive) に置き換えることは通常認められないが、文の主たる動詞が否定された場合に限りはこの格交替が認可されることがある。

- (3) a. 

<i>Otv'ét</i>	<i>iz</i>	<i>pólk-a</i>	<i>n'e</i>	<i>pr'is-él</i> .
<i>answer-M.SG.NOM</i>	<i>from</i>	<i>regiment-M.SG.GEN</i>	NEG	<i>arrive-3.SG.M.PAST</i>

 (Babby 1980: 71)  
 「連隊からのその返答はまだ到着していない」  
 b. 

<i>Otv'ét-a</i>	<i>iz</i>	<i>pólk-a</i>	<i>n'e</i>	<i>pr'is-l-ó</i> .
<i>answer-M.SG.GEN</i>	<i>from</i>	<i>regiment-M.SG.GEN</i>	NEG	<i>arrive-3.SG.N.PAST</i>

  
 「連隊からは何の返答もなかった」  
 (4) a. 

<i>Anna</i>	<i>n'e</i>	<i>kup'i-la</i>	<i>žurnál</i> .
<i>Anna-NOM</i>	NEG	<i>buy-3.SG.F.PAST</i>	<i>magazine-M.SG.ACC</i>

 (Harves 2013: 1)  
 「アンナはその雑誌を買わなかった」  
 b. 

<i>Anna</i>	<i>n'e</i>	<i>kup'i-la</i>	<i>žurnál-a</i> .
<i>Anna-NOM</i>	NEG	<i>buy-3.SG.F.PAST</i>	<i>magazine-M.SG.GEN</i>

  
 「アンナは雑誌なんて買わなかった」

<sup>1</sup> 本発表は日本学術振興会の科学研究費助成事業による科学研究費補助金の交付を受けて行なった研究の成果である (JSPS KAKENHI Grant Number JP 21J22225)。

<sup>2</sup> 現代ロシア語における動詞の過去形は原則的に「主語となっている主格名詞句」の性・数に一致する。そのため主語 (として意図されているもの) が主格名詞句でない場合には動詞の過去形が一致先を失うことになり、例文 (3b) のような中性過去の語尾を示すことが予想される。ここで敢えて [*pr'is-él* / *pr'is-l-ó*] という形で2種類の過去形を比較することの眼目は、動詞の語尾をより適切と思われる形に整えてもなお肯定文における生格主語が認可されないということを示すことにある。

スラヴ諸語に典型的なこの交替は「否定生格 (Genitive of Negation; Gen-Neg)」の名で知られ、特に現代ロシア語におけるその意味的特徴としては、否定生格に置かれた名詞句の指示対象に関する「存在コミットメントの不在」が古くから指摘されてきた (Chvany 1975, Babby 1980, Borschev & Partee 2002a, Harves 2002a, 2013, Partee & Borschev 2004, Kagan, 2007, 2010, 2013, Borschev et al. 2008)。たとえば上の (3a, b) は、主語の指示対象として具体的な対象を話し手が念頭に置くか否かという点で異なる。(3a) の話し手は、典型的にはある特定の *Otv'ët* 「返答」を念頭に置いた上で「それが話し手のもとに到着しなかった」ということを意味し、反対に (3b) を発話する話し手は否定生格に置かれた主語名詞句 *Otv'ët-a* 「返答」の指示対象としていかなる対象も想定しないままに「そう呼べるようなものは一つも届かなかった」ということを伝達する。「存在コミットメントの不在」とはこのように、「当の名詞句が表す属性を備えた対象が現に存在するということを発話の前提としていない」という話し手の態度のことである。こうした話し手の態度の違いは、他動詞文 (4a, b) にも同様に観察される<sup>3</sup>。

否定生格が持つ上記のような意味的特徴が何に由来するのか。あるいはこの格交替の正確な認可条件は何であるのか——これらの問いめぐっては Babby (1980) を筆頭に、これまで多くのインクが流され、今日に至ってなお百家争鳴の様相を呈している。次節ではその中でも、否定生格の認可条件を説明するものとして初期に提出された「情報構造説」(Babby 1980, 他) およびその代案として位置付けられる「非対格説」(Pesetsky 1982, 他; cf. Harves 2002b) を取り上げ、それらによる洞察と問題点とを確認する。そしてその問題点は Partee & Borschev (2004, 2007, 他) が「視点構造」(perspectival structure) なる概念を導入したことでかなりの程度克服されると目されていることを示した上で、続く3節で視点構造説が抱える飛躍を Recanati (2000) による私たちの認知的態度にまつわる議論の援用によって補う。

## 2. 情報構造・非対格性・視点の中心

Babby (1980) は自動詞文一般について、(1) のようにその述部のみを「主張のスコープ」(“Scope of A”; *ibid.*) とする (Theme-Rheme 構造を持つ) 場合と、下の (5) のように文全体が主張のスコープに収まる (Rheme のみからなる) 場合とがあることに着目し、前者を「叙述的 (declarative)」な自動詞文、後者を「存在に関わる (existential)」自動詞文と呼び分ける<sup>4</sup>。この基準に照らすと、上に見た (3a) は、主語名詞句 *Otv'ët* 「返答」(の指示対象) を Theme とした上でそれが到着したか否かを表す部分を Rheme とする場合に用いられるために「叙述的な否定文」(以降 NDS; negated declarative sentence) に分類される。これに対し、否定生格に置かれた *Otv'ët-a* 「返答」を主語とする (3b) は、連隊からの応答がなかったという出来事をその発話全体によって伝達しようとする文脈で用いられるという点で文全体が Rheme となっている。それゆえ (3b) は (5) に対応する否定文、すなわち「存在に関わる否定文」(以降 NES; negated existential sentence) であるとみなされる。

- (5) *Pr' iš-él*                      *otv'ët*                      *iz*                      *pólk-a*                      (Babby 1980: 71)  
 arrive-3.SG.M.PAST    answer-M.SG.NOM                      from                      regiment-M.SG.GEN  
 「連隊から (なんらかの) 返答があった」

表 1: Babby (1980) による情報構造に基づく自動詞文の分類

	Affirmative	Negated
Existential	[Scope of A VP NP] (e.g., (5))	[n'e VP NP-GEN] (e.g., (3b))
Declarative	NP [Scope of A VP] (e.g., (1))	NP-NOM [n'e VP] (e.g., (3a))

上記の観察から、Babby は主語における否定生格は NES にのみ生ずる、すなわち「その文の主語が Theme で

<sup>3</sup> Borschev et al. (2008) や Kagan (2007, 2010, 2013) を始めとする論者はこの特徴について「否定生格に置かれた名詞句は意味論的タイプ・シフトによって対象を指示する機能を失い、属性を表す機能のみを持つようになる」と要約できる仮説を提唱している。また Bailyn (2004, 2012) は否定生格を付与する発音のない量化詞 Q を想定し、Q の補部を占める否定生格名詞句が意味論的に量化された意味を持つようになるために個体指示性が失われると考える。これらの説についてここで詳しく取り扱うことはしないが、本発表の主張がこれら仮説と競合するポイントはないと思われる。

<sup>4</sup> Babby によるこの分類は自動詞文に限定的な分類であるものの、Kuroda (1972) による categorical / thematic の対立や Lambrecht (1994) による predicate-focus / sentence-focus の対立といった、より人口に膾炙する分類と大まかに対応すると思われる。ただしのちに見るように、存在に関わる自動詞文であるからといって必ず文全体が Rheme であるとは限らないため、完全に対応するものでもないと思われはしている。

なく、文全体が Rheme となっている」場合にのみ生ずると考える (以降「情報構造説」)。  
 しかし次の例文に見られる通り、Theme となっている名詞句が否定生格を認可する場合もある。

- (6) (犬が話題になっているときに)  
**Sobák'-i** u m'en'á n'et. (Arutjunova 1976)  
**dog-F.SG.GEN** at I-GEN be-NEG  
 「犬は飼ってないよ」
- (7) *Mýš-i* v dóm'-e ést'?  
 mouse-pl.nom in house-m.sg.loc be?  
 —N'et, *mýš-ěj* v dom'-e n'et. (Arutjunova 1997)  
 —No, **mouse-F.PL.GEN** in house-M.SG.LOC be-NEG  
 「ねずみって (その) 家の中にいる? —いや、ねずみは (その) 家の中にはいないよ」
- (8) (ケフィール<sup>5</sup>を探していて)  
**K'ef'ír-a** v magaz'in'-e n'é bylo. (Borschev and Partee 2002a,b)  
**kefir-M.SG.GEN** in store-M.SG.LOC NEG be-N.SG.PAST  
 「ケフィールは店にひとつもなかった」

このことは Babby (1980) による NDS-NES の区別が、情報構造の違いに完全に対応しているわけではないことを意味する。つまり情報構造説における「主張のスコープ」は——Babby 自身の見立てに反して——Rheme と同一視すべきものではないということになる。

では「主張のスコープ」とは何なのか。その情報構造的でない解釈として、Pesetsky (1982), Harves (2002a, b) 他の支持する“非対格”説がある。彼/彼女らは、Perlmutter (1978) の非対格仮説に従い、自動詞文の (見かけ上の) 主語が深層構造においてはその自動詞を head とする VP の補部 (=内項) に位置する場合があると考え、自動詞文が否定生格を認可するのはその場合に限られるとした。つまり、非対格説にとって「主張のスコープ」とはすなわち深層構造における VP にほかならない。この説明に従うと、(6)-(8) のような自動詞文の主語が Theme であるにも関わらず否定生格を認可するのは、それぞれの主たる動詞が非対格動詞であるためである、ということになる。

非対格説の利点は、(6)-(8) のような例が例外でなくなるのみならず、(4b) のような「他動詞の直接目的語」が否定生格に置かれるケースをも同時に説明しうるところにある。というのも、通常対格に置かれる他動詞の直接目的語と、非対格自動詞の主語は、「VP の補部に位置する」という点で共通しているからである。非対格説はこのような形で Babby (1980) の「主張のスコープ」を読み替えることで、彼の洞察を引き継ぎつつより一般性の高い説明を与えたと言える。

ここで問題となるのは、一見すると非能格動詞であるように思われる自動詞の主語が否定生格に置かれる場合があるという事実である。

- (9) *V* bas's'ějn'-e n'ikakógo r'ebénk-a n'e pláva-et.  
 in pool-M.SG.LOC no-M.SG.GEN child-M.SG.GEN NEG [float/\*swim]-3.SG.PRS  
 「プールには子供は一人も [浮かんで / \*泳いで] いない」 (Pesetsky 1982: 45)
- (10) *M'ěždu* br'évn-am'i ne skryvá-lo-s' tarakán-ov. (Babby 2001 :50-51)  
 between beam-N.PL.INST NEG hide-3.SG.N.PAST cockroach-M.PL.GEN  
 「丸太の間にゴキブリは一匹も隠れていなかった」
- (11) *Zd'es'* n'ikogdá n'e š-l-o dožd'-ěj. (McGrady 2022: 6)  
 here never NEG go-3.N.SG.PAST rain-M.PL.GEN  
 「ここじゃ雨なんか降らない (これまで一度も降ってこなかった)」

上の例文中の *pláva-et*, *skryvá-lo-s'*, *š-l-o* はいずれも通常は「泳いでいる」「隠れていた」「歩いていた」といったような動作主性の高い意味をもつ非能格動詞に数えられる。非対格説を支持するならば、これらの動詞は、この文脈に限っては「浮かんでいる」「潜んでいた」「続いていた」といった動作主性の低い意味を表す

<sup>5</sup> ヨーグルトによく似た乳飲料。日本ではしばしば「ケフィア」と呼ばれる。

までに漂白 (bleach) されている、すなわち一時的に非対格動詞となっていると考えざるを得ない。

仮に一時的な意味漂白が起きているのだとしても、なぜそれが起こるのかを説明する道具立てを非対格説は持ち合わせていない。Borshev & Partee (2002a), Partee & Borshev (2004, 2007) 他はこれに対し、NDS-NESの区別にとって決定的なのは情報構造でも非対格性の有無でもなく、それによって表象される場所の出来事を捉える話し手の「視点の中心」(perspectival center) の違いであるとする説(以降「視点構造説」)を提出することで、「主張のスコープ」の変化や「動作主性の漂白」を統一的観点から説明することを試みる。

- (12) a. *P'ét'a*                    *na*                    *koncért'-e*                    *n'é*                    *byl.*                    (Partee & Borshev 2004: 218)  
**Petja-NOM**                    at                    concert-M.SG.LOC                    NEG                    be-M.SG.PAST  
「ペーチャはコンサートに行かなかったよ」
- b. *P'ét'-i*                    *na*                    *koncért'-e*                    *n'é*                    *bylo.*                    (loc. cit.)  
**Petja-GEN**                    at                    concert-M.SG.LOC                    NEG                    be-N.SG.PAST  
「ペーチャはコンサートに来てなかったよ」
- (13) —*Koncért-a*                    *n'é*                    *bylo.*                    (loc. cit.)  
—concert-M.SG.GEN                    NEG                    be-N.SG.PAST.  
「(だって)コンサートなんてなかった(から)」

事実として、主語が主格に置かれた否定コピュラ文 (12a) を発話した直後に (13) を続けることに問題はないが、主語が否定生格に置かれたミニマル・ペア (12b) 「ペーチャはコンサートには来てなかったよ」の直後に (13) 「だってコンサートはなかったから」を続けるのは奇妙に響く (loc. cit.)。これは (12b) が、(12a) と異なり、実際にコンサートを聴きに会場まで行った話し手が記憶を頼りに「そのコンサート会場にペーチャが現れることはなかった」ということを報告しているように聞こえる<sup>6</sup>ことに由来すると考えられる。つまり、話し手自身がコンサート会場にいたということを発話が暗に意味してしまう以上は、直後に当のコンサートがなかったということをまさにその話し手が述べるのは不合理になるということである。この事実は、(12a, b) は共にその主語 *P'ét'[-a / -i]* 「ペーチャ」を Theme としつつも、何か別のレベルで異なっているということを示している。

Partee & Borshev (2004, 2007) 他は情報構造や非対格性とは別のレベルにあると思しき上記の特徴を、発話の「視点構造 (perspectival structure)」に起因するものとする。まず彼女らは、Babby (1980) の言う「存在に関わる」という NES (ひいてはそれに対応する肯定文 AES) の特徴を、文中に表される「モノ (THING)」が文中に表される「場所 (LOC)」に対して相対的位置関係を持つということが述語によって表されていることとであると定義し、その上で NDS-NES の区別にとって決定的なのは視点構造の違いであると主張する。

- (14) 視点構造:「存在/所在の状況」[存在者 THING とその位置 LOC の 2 者からなる状況]は THING [e.g., ペーチャ] の視点からも LOCation [e.g., コンサート] の視点からも構築される。私たちは「視点の中心」という言葉を状況構築の出発点として選ばれた参加者を表すものとして用いる。
- (15) NES の意味論: NES は主語 NP によって表される THING の、視点の中心となっている LOC における存在を否定する。 (Partee & Borshev 2007: 156-157; 拙訳。強調・注釈も発表者による)

この主張に従えば、「状況構築」の順序は THING→LOC と LOC→THING の 2 通りが可能であることになり、(12b) における否定生格主語の出現 (= (12b) が NES であること) はこの LOC (コンサート)→THING (ペーチャ) という状況構築順序の反映にほかならないということになる<sup>7</sup>。このように捉えることの利点は、上の (9)-(11) のように非能格動詞が否定生格主語を認可する事例を、LOC が視点の中心であるために生じているものとして取り扱うことができる点にある: 例文中に下線で示した通り、(9)-(11) はいずれも場所句が文頭に移動した有標な形式である。この有標性によって視点の中心が LOC となることで、当の文が主たる自動詞のカテゴリーや情報構造の如何に関わらず NES/AES となる。ここで「存在する」という事態が意図性/動作主性の関わる事態でないことを考えると、NES/AES の「存在に関わる」という特徴は本来的に無人称

<sup>6</sup> ハバロフスク出身ペテルブルク育ちの 30 代の女性にインフォーマントとなっていた際のご回答に基づく。この場を借りてご協力に心より感謝申し上げます。

<sup>7</sup> Partee らは明言していないが、THING と LOC の両者を同時に状況構築の出発点とすることはどうやら許されないようである。

的であることになる。すると (9)-(11) は文全体の特徴として無人称性を獲得することになり、その無人称性が主たる非能格動詞の意図性／動作主性を「上書き」することで意味漂白が起こる。その結果として非能格動詞が一時的に非対格動詞の役割を果たし、その主語において例外的に否定生格が認可される——このようなシナリオを描くことを、視点構造説は可能にする。この点で視点構造説には情報構造説・非対格説の不足を補う長所があると言える。

### 3. 存在コミットメントはいかにして削除されるか

視点構造説は以上のような利点を持つことから今日においても支持者が少なくない (e.g., Partee et al. 2011, Irwin 2012, 2018, McGrady 2022)。しかしながらこの説明には不明瞭な点が二つある。第一に、Harves (2013) がいみじくも指摘する通り、Partee らの言う「視点構造」なるものが人間の言語能力のどのレベルに位置付けられるものなのかが定かではない。そして第二に、場所句を有標な形で明示することによって状況構築の出発点が LOC となるというところまでは認めるとしても、それによって THING に関する存在コミットメントが削除されるメカニズムが不明である。

- (16) *N'e š-l-o* [*\*dožd'-á* /*\*dožd'-ěj*]. (McGrady 2022)  
 NEG go-3.SG.N.PAST rain-M.SG.GEN rain-M.PL.GEN  
 「雨なんか降ってなかった」を意図

McGrady (2022) の言うように、(16) の如き「移動動詞によって天候／季節を表す構文」(以降 WSE) は通常否定生格を認可しないが、(11) のように場所句が有標な形で明示される場合には例外的に否定生格を認可する。このことは、WSE がデフォルトでは THING (この場合は雨) を「状況構築の出発点」としているものとして解釈されるものの、場所格倒置を伴う場合に限っては LOC が視点の中心となり、WSE 全体が NES / AES として解釈されうことを示唆する。しかし先述のシナリオ通り NES の無人称性の影響で移動動詞 *š-l-o* が一時的に非対格動詞として振る舞うのだとしても、それは動作主としての THING の存在を前提にする必要がなくなるだけであり、VP の補部を占める名詞句の指示対象にまつわる存在コミットメントが削除されることを直接には意味しない (例えば被動作主としての存在コミットメントを持つかもしれない)。しかし現に (11) における *dožd'-ěj* 「雨」の存在コミットメントは削除されているように思われる。ここには埋めるべき空隙がある。

状況を——それも雨降りの状況を——表象 (represent) する発話／思考における場所句の明示と私たちの認知的態度との関係を論じた論考に Recanati (2000) がある。Recanati は、モスクワ<sup>8</sup>にいる話し手が次の (17) を発話するとき (18) を発話するときとで私たちの心的表象のあり方が異なるのだと言う。

- (17) *Id'-ét dožd'.*  
 go-3.SG.PRS.IMPF rain-M.SG.NOM  
 「雨が降っている」  
 (18) [*Zd'es' /V Moskv'-e*] *id'ét dožd'.*  
 [here /in Moscow-LOC] go-3.SG.PRS.IMPF rain-M.SG.NOM  
 「[ここで／モスクワで]雨が降っている」 (McGrady 2022: 4, cf. Recanati 2000: 58)

Recanati によれば「これは単なる言い方の問題ではない」(ibid.; 拙訳)。(17) を発話／思考するとき、その主体は「発話／思考が行われた場所 (すなわちモスクワ) において雨が降っている」という状況を表象しているが、この表象はその場所の内部から捉えられたものであり、決して航空写真を眺めるようにして当の場所そのものを思考の対象としているわけではない。言い換えれば、(17) は「まさに目の前で起こっている降雨現象」について (about) の発話／思考であって、発話／思考の生じた当の場所あるいはモスクワという都市について (about) の発話／思考ではない。むしろこれはその場所に根ざした (concern) 発話／思考である。それゆえ、文としての (17) は、その話し手が発話時点で位置している場所の天気図<sup>9</sup>を見ているときや遠隔地の友人と電話をしている場合などには好まれず、典型的には窓や空を見て言われる。これに対し (18) は、発

<sup>8</sup> 原文ではパリ。

<sup>9</sup> この天気図は何らかの最新の技術によってリアルタイムに更新されるものとする。

話／思考のなされたその場所（「ここ」あるいはモスクワ）をもその対象に含んだ表象である。それゆえ (18) を発話／思考する主体は、まさにその場所において雨が降っているという状況を、他の都市（例えばペテルブルク、あるいはパリや東京）における空模様と比較しようと思えば比較できるものとして、すなわちその場所の外部から状況を捉えることになる。つまり (18) は、Zd'es' 「ここで」 V Moskv'e 「モスクワで」といった場所句の明示により、(17) と異なり、発話／思考が生じた場所についての表象となっているのである。そしてこのことは (18) の主体が——先述の「遠隔地の友人との電話」の文脈のように——より大きな状況（例えばロシア全土）に根ざした思考をしていることを意味する。このことを状況意味論の記法で模式的に表すと次のようになる。

- (19) [Москва] = << Идет дождь. >> (= (17) に対応)  
 (20) [Россия] = << Москва = <<Идет дождь.>> >> (= (18) に対応) (cf. Recanati 2000: 66)

記号“=”の左辺は発話主体が当の発話において根ざしているところのより大きな状況を表し、右辺はその発話が直接の描写対象としているもの——上で見た「について」の側——を表す。“[ ]”の内部に書かれた「より大きな状況」は発話／思考において明示されることはないものの、それはその発話／思考が有意味なものとなるために欠かし得ないものとしてそれを「支えて (support)」いる。より具体的に言えば、「雨が降っている」という字面／音韻列単体ではどこでいつ雨が降っているのかを特定する情報を持たないが、「モスクワでそれが発話された」という状況による支えがあることで (17) の発話は有意味となる。このことを表現したのが (19) である。他方 (20) は、(17) に場所句が付け足されることによって「一歩引いた発話／思考」としての (18) が実現していることを表現している。ここにおける “[ ]” の中身は文脈によってはロシアではないかもしれない（例えばヨーロッパ、ユーラシア大陸、地球全土、あるいは太陽系かもしれない）が、いずれにせよ (18) のような発話／思考がなされる時、その主体は何らかのより大きな状況に支えられて発話／思考をしていると言える。ここにおける「モスクワで雨が降っている」ということがより大きな状況の中で成立している」とでもいふべき思考の入れ子構造を表現したのが (20) である。

(19) のような思考から (20) のような思考へと「一歩引く」認知過程を Recanati は「反省 (reflection)」と呼ぶ。この用語法に従えば (17)-(18) 間の差は「(18) の話し手のほうが (17) の話し手に比して反省している」と表現されることになるが、この差異は (18) ひいては (11) の話し手が「LOC を視点の中心としている」ということとどのように関わるだろうか。これに関しては Partee & Borschev (2004, 2007, 他) による「存在する」という概念の定義にヒントがある。

- (20) “存在=相対的”原理：(AES と NES に関わる意味での) 存在とは常に場所 (LOCation) に相対的なものである。

彼女らの定義では、「何かが存在する」という状況は必ず LOC に依存した形で、すなわち「何かがどこかに存在する」という形でのみ成立する。これは次の (21) のような「存在動詞」を主たる動詞とする NES において、暗に「この世界」のようなものが LOC とみなされることで否定生格が認可される事実とも呼応する。

- (21) Ed'inoróg-ov ne [byvá-et. /suščestvu-et] (作例)  
 unicorn-M.PL.GEN NEG be-3.SG.PRS /exist-3.SG.PRS  
 「ユニコーンなんか [いない / 存在しない]

「存在に関わる (existential)」以上は LOC に関わらなければならない。このことは次の帰結をもたらす。すなわち、(21) における存在動詞のような存在に関わる意味をデフォルトでは持たない動詞——例えば移動動詞——を主たる動詞とする文が「存在に関わる」ためには、それを発話する話し手が何らかの別の形で「反省」し、(20) のような「場所を対象に含んだ反省的思考」がトリガーされる必要があるということである。それを達成する手段の一つが場所句の倒置であると考えるのが、本発表のアイデアである。

場所格の倒置が、それが出現した文の話し手の反省的態度を避けがたく誘発する。このように考えることで、この節の冒頭に述べた二つの問題点を首尾よく克服することができる。まず「視点構造」なるものの位置付けが定かでないという問題については次のように応答できる：確かに Partee & Borschev (2004, 2007, 他) の言う 2 種類の「視点構造」は、存在に関わる自動詞文の差異を説明するために持ち出される特定の概念

であったが、「反省」を経ているか経ていないかというより一般的な（存在に関わる表象に限らない）観点からこれらを捉えることにより、私たち人間が状況を言語によって表象する際にとりうる 2 種類の認知的態度の特殊事例として位置づけることが可能である。そして第二の問題点、すなわち THING に関する「存在コミットメント」が削除されるメカニズムが不明であるという点については次のような説明を加えることができる：確かに「状況構築の順序」としての視点構造にこだわる限りは、視点の中心に置かれた THING/LOC の存在前提は説明できても、視点の中心に置かれていない側の要素の存在にコミットしない理由が説明されない。しかし本発表のように 2 種類の視点構造を「反省を経ている認知的態度の特殊事例」(=THING 中心) と「反省を経ている認知的態度の特殊事例」(=LOC 中心) と考えることで、後者にのみ、反省的思考一般が持つ「他の状況を視野に入れる」という特徴を帰属させることができるようになる ((18) の話し手の態度に含まれる「モスクワの空模様を、他の都市の空模様と比較しようと思えば比較できる」という特徴はこの一般的特徴からの帰結である)。これにより私たちは、単一の LOC に根ざす非反省的思考においてはそれを支える LOC が一つしかないために「常に LOC に相対的なもの」としての存在概念が否定し得ないのに対し、複数の LOC を視野に収めるより大きな状況に根ざす反省的思考においては、「THING が視野の中のどの LOC と相対的存在関係を結ぶのか」が不問に付されることになる、と考えることができるようになる。後者の認知的態度が意味するのは、当の状況を表象している認知主体であるところの話し手の中に「THING がどの LOC と相対的存在関係を結ぶのか」に関するコミットメントがないということであり、それはすなわち、THING に関わる (Partee らの言う意味での) 存在コミットメントが不在であるということにほかならない。かくして、第二の問題点は解決される。

以上の議論により本発表は、情報構造説・非対格説の不足を補う説明としての視点構造説が抱える飛躍は私たちの一般的な認知的態度の観点から埋め合わせることが可能であることを示した。場所句の有標な倒置は私たちに「反省」を促すことにより、LOC に相対的な意味での存在に関するコミットメントを、確かに削除するのである。この結論は現代ロシア語の格標示にまつわる意味論に貢献するのみならず、存在文一般の意味論、ひいては存在という概念そのものについての主張を含むという点で一般性の高い含意を持つ。

#### 参考文献

- Arutjunova, Nina D. (1976) *Predloienie i ego smysl* [The Sentence and its Meaning]. Moscow: Nauka. / —. (1997) *Bytijnye predloienija* [Existential Sentences]. In *Ėnciklopedija "Russkij jazyk"*: 57-59. Moscow: Bol'saja Rossijskaja Ėnciklopedija. / **Babby, Leonard H.** (1980) *Existential sentences and negation in Russian*. Ann Arbor, MI: Karoma. / —. (2001) The genitive of negation: a unified analysis. In Franks, S., T. H. King & M. Yadroff (eds.) *Proceedings of formal approaches to slavic linguistics 9: the Bloomington meeting 2000*: 39-55. Ann Arbor, MI: Michigan Slavic Publications. / **Bailyn, John F.** (2004) The case of Q. In O. Arnaudova, W. Browne, M. L. Rivero, and D. Stojanovic (eds.) *Formal approaches to Slavic linguistics 12: the Ottawa Meeting*: 1-36. Ann Arbor, MI: Michigan Slavic Publications. / —. (2012) *The syntax of Russian*. New York: Cambridge University Press. / **Borschev, Vladimir and Barbara H. Partee** (2002a) The Russian genitive of negation in existential sentences: the role of theme-rheme structure reconsidered. In E. Hajicová, P. Sgall, J. Hana, and T. Hoskovec (eds.) *Travaux du Cercle linguistique de Prague* (nouvelle série). Amsterdam: John Benjamins. / —. (2002b) The Russian genitive of negation: theme-rheme structure or perspective structure? *Journal of Slavic Linguistics* 10: 105-144. / **Borschev, Vladimir, Elena V. Paducheva, Barbara H. Partee, Yakov Testelefs, and Igor Yanovich** (2008) Russian genitives, non-referentiality, and the property-type hypothesis. In A. Antonenko, J. F. Bailyn and C. Bethin (eds.) *Formal approaches to Slavic linguistics* 16: 48-67. Ann Arbor, MI: Michigan Slavic Publications. / **Chvany, Catherine** (1975) *On the syntax of BE-sentences in Russian*. Cambridge, MA: Slavica. / **Harves, Stephanie** (2002a) Unaccusative syntax in Russian. Princeton: Princeton University dissertation. / —. (2002b) Genitive of negation and the existential paradox. *Journal of Slavic Linguistics* 10 (1) *A special volume in honor of Leonard H. Babby*: 185-212. / —. (2013) The genitive of negation in Russian. *Language and Linguistics Compass* 7(12): 647-662. / **Irwin, Patricia** (2012) Unaccusativity at the interfaces. New York: New York University dissertation. / —. (2018) Existential unaccusativity and new discourse referents. *Glossa: a journal of general linguistics* 3 (1): X. 1-42. / **Kagan, Olga** (2007) Property-denoting NPs and non-canonical genitive case. In T. Friedman & M. Gibson (eds.), *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory* 17: 148-165. Washington DC: LSA. / —. (2010) Genitive objects, existence and individuation. *Russian Linguistics* 34 (1): 17-39. / —. (2013) *Semantics of genitive objects in Russian: a study of sensitive of negation and intensional genitive case*. Dordrecht: Springer. / **Kuroda, S.-Y.** (1972) The categorial and thethetic judgment: evidence from Japanese syntax. *Foundations of Language* 9 (2): 153-185. / **Lambrecht, Knud** (1994) *Information structure and sentence sorm: topic, focus, and mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press. / **McGrady, Christiana** (2022) Weather/season expressions, existential commitment, and the genitive of negation. *Journal of Slavic Linguistics* 29: 1-13. / **Partee, Barbara H. and Vladimir Borschev** (2004) The semantics of Russian genitive of negation: the nature and role of perspectival structure. In Kazuha Watanabe and Robert B. Young (eds.) *Proceedings of semantics and linguistic theory (SALT)* 14: 212-234. Ithaca, NY: CLC Publications. / —. (2007) Existential sentence, BE, and the genitive of negation in Russian. In I. Comorovski and K. von Heusinger (eds.) *Existence: semantics and syntax*: 147-190. Dordrecht: Springer. / **Partee, Barbara H., Vladimir Borschev, Elena V. Paducheva, Yakov Testelefs, and Igor Yanovich** (2011) Russian genitive of negation alternations: The role of verb semantics. *Scando-Slavica* 57 (2): 135-159. / **Perlmutter, David M.** (1978) Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. In *Proceedings of the 4th annual meeting of the Berkeley Linguistics Society*: 157-190. Berkeley: University of California Press. / **Pesetsky, David** (1982) Paths and categories. PhD Dissertation, MIT. / **Recanati, François** (2000) *Oratio obliqua, oratio recta: an essay on metarepresentation*. Cambridge: MIT Press.